

めだか談義

メダカ発世の中つれづれの記 2020・10・18



日本は、国土の 65%が森林だそうです。これは国土面積のなかで森林が占める割合ではフィンランドについて世界第2位の数字、「水」に恵まれている国土とも言えますね。そして、そのたくさんの「森」の麓には、たくさんの「里山」があり、自然の資源を生かした循環型の生活文化が根づいてきました。その「里山文化」の重要性に国も気づき、「里地里山保全活動行動計画」（環境省）を策定し、全国にモデル地区を多く選定。小田原では、久野地区と東栢山地区が選ばれています。然しながら、ではそこで何が行われ、何がどう守られているのか、さっぱり僕たちに伝わってきていません。「里山」を支える生物多様性の危機については、人間活動や開発による「第一の危機」、里地里山などにおける人間活動の縮小による「第二の危機」、人間により持ち込まれた外来種などによる「第三の危機」、地球温暖化による危機、など問題点の指摘はあるものの、指針にあるのは、「第二の危機」が中心で、肝心の「第一の危機」つまり、開発の抑制などについては詳しく触れてはいません。その「行動計画」が示されたのは2010年。ちょうど、名古屋で生物多様性条約締結国会議COP10が開かれた年でもありました。このセッションのなかに「SATOYAMA イニシアティブ」（里山文化を先導している、という解釈で良いと思います）という考え方が示され、国内での22の事例が紹介されました。そのなかに、「桑原めだか米の会」の取組もありました。これは、農水省への生物多様性戦略検討部会での報告がきっかけだったわけですが、世界195の国と地域に発信されました。22の事例の中には、兵庫県豊岡市のコウノトリとの共生を目指した農業への取組や、同じく、新潟県佐渡市のトキと共生する農業など「めだか米」と同様に生物環境との共存による「生き物ブランド品」例はもとより、「森は海の恋人」とうたった宮城県大川流域の運動など日本全国から興味深い事例が選ばれています。「国」が、里地里山を守ろうと重い腰をあげるずっと前から、「民」は「里山の循環文化」が途絶えていく危機を感じて動き始めていたわけですね。さて、その「桑原めだか米の会」のことです。発足は2001年。在来メダカが絶滅危惧種リストに記載された直後のことでした。

山田純さんの思いは、地域の住まい価値と「食」を結ぶことで農業も存続させ、メダカ生息地も保全するという、いわば経済活動と環境保護という相容れにくいふたつを同時実現させることだったのではないかと想像します。経済的に見合わないから農業に見切りをつける、だから後継者も出てこない、そうした現状を打破するため農家から喜んでもらえる価格で買い取り（農協の買取価格を上回る値段で）、消費者には求めやすい価格で販売するという取組への着手でした。同時に、農家へはメダカ生息地維持のための願いを伝え、（それは生態系保持型農業の推進、転換という願いでもあり）、地域としての自然・農業景観の価値を伝えることでもありました。農家からの仕入れだけではありません。流通も開拓しなければなりません。これも山田純さん、孤軍奮闘します。現在、取扱量は、うるち米、酒米あわせて13トンほど。（山田さんに聞かないと、正確な数字ではない可能性）これを近いうちに20トンまでにしたいと以前に聞いたことがあります。しかし、それには、山田さん一人が東奔西走しているやり方をどう変えていけるか、休耕田を管理し生産する「小田原農人めだかの郷」の高齢化をどう解消できるか、などの難問が幾重にも立ちはだかります。そして、開発の触手からどうガードし、生息地を守り、田んぼを守っていけるのか、知恵が求められています。「SATOYAMA イニシアティブ」のお手本事例として世界に紹介された「桑原めだか米」の取組が持続可能となるように、僕たち「めだかサポーターの会」は「めだか米サポーターの会」にもなる必要が出てくるかもしれません。何年かぶりに「里山資本主義」（藻谷浩介・NHK広島取材班）をひっぱりだして再読を始めています。勇気を貰える名著です。

めだか米は、SATOYAMA イニシアティブのひとつ。